

# 消化管がんにおける細胞増殖因子受容体および下流シグナル伝達物質の遺伝子変異解析に関する研究

## 1. 研究の対象

2009年2月～2025年3月に当院で食道がん、胃がん、大腸がん、GIST、消化管原発神経内分泌腫瘍の治療を受けられた方

## 2. 研究目的・方法

**研究概要：** 消化器がんの予後は、近年の医学の発展により改善を認めていますが、進行がんにおける予後は依然として満足できるものではありません。現在、がん細胞の遺伝子の異常を解析することにより、早期診断につながる新たな腫瘍マーカーの開発、遺伝子異常を標的とした治療薬の開発が進められています。細胞の表面にはいくつかの細胞増殖因子受容体と呼ばれるタンパクが存在し、細胞外の刺激を受けると、細胞内にがん細胞が増殖するような信号（下流シグナル伝達）が伝えられます。正常の細胞と比較して、がん細胞では、ある特定の増殖因子受容体が過剰に発現していたり、細胞内の下流シグナルの一部の遺伝子が変異を起こしていることが分かっています。これらの細胞増殖因子受容体と下流シグナルの遺伝子変異を解明することで、将来的な早期診断の腫瘍マーカーや分子標的治療薬の開発が進められています。

**研究目的と意義：** 本研究は、腫瘍組織における細胞増殖因子受容体のタンパク発現や下流シグナルの遺伝子変異（DNA、RNA、メチル化異常など）、薬剤代謝関連酵素を解析することで、新たな消化器がんの発生、がんの増殖、浸潤、転移、抗がん剤の抵抗性などに関わる特徴的な遺伝子異常を解明することを目的としています。がんに関わる遺伝子異常が新たに解明されることで、がんの早期発見と根治が期待できる対象が増える他、進行がんにおいては遺伝子異常を標的とした新たな治療薬の開発（個別化治療）が可能となることから、今後のがん診療に貢献する意義は大きいと考えられます。

**研究方法：** 当院に保管されている腫瘍組織を用いて、当院もしくは外部の測定機関において、がん細胞の増殖に関与する遺伝子変異を解析します。測定されたデータは統計学的手法を用いて、がん診療において意義のあるものかを評価します。

**研究実施期間：** 2009年2月～2025年3月31日

## 3. 研究に用いる試料・情報の種類

**情報：** 病歴、化学療法の治療歴、カルテ番号、病理検体番号等

**試料：** 手術で摘出した組織

#### 4. 外部への試料・情報の提供・公表

研究期間への試料・情報の提供は、特定の関係者以外がアクセスできない状態で行います。試料は郵送、情報は電子的配信で行います。対応表は、当センターの研究責任者が保管・管理します。結果の公表は、学会および論文にて行います。

#### 5. 研究組織

国立がん研究センター中央病院 加藤 健  
長崎大学 益谷 美都子  
金沢大学 澤田 武  
札幌医科大学 佐々木 泰史  
ペイラー大学 Ajay Goel

#### 6. 問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。  
ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、試料・情報が当該研究に用いられることについて、患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としないので、下記の連絡先までお申出ください。

この場合も患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

〒104-0045 東京都中央区築地 5-1-1

国立がん研究センター中央病院 消化管内科 加藤 健（研究責任者）

TEL：03-3547-2511

研究代表者：

国立がん研究センター中央病院 加藤 健